

第3回市史講座ミニレポート：平成30年6月16日（土）

「松江市域における民藝運動の展開--出雲民藝紙と布志名焼を中心に--」

吉儀和平先生（『松江市史』通史編「近現代」執筆委員）



今回の市史講座では、『松江市史』通史編「近現代」執筆委員の吉儀和平先生に、松江市域における民藝運動の展開についてお話しいただきました。

まず、民藝運動について、その創始者であり指導者だった柳宗悦の著書『民藝とは何か』（1941年刊）から言葉を引きつつ概要を紹介されました。ちなみに、柳宗悦もバーナード・リーチも非常に「紳士」で「オシャレ」だったそうで、残る写真は常に背広に帽子着用。リーチなどはロクロを引くときもネクタイ姿で、作業着なんてもってのほか。つまり、服を土で汚すことなどありえない相当な腕前だったということです。

次に、島根県の民藝運動を主導した太田直行（1890～1984）について、その著書『島根民藝録』（1935年刊）を引用し、1931年の「島根工藝診察」や「民藝晩餐会」に始まる太田の活動によって民藝運動の種子が全県下にまき散らされた、と紹介されました。なお、松江商工会議所理事だった太田は、「宍道湖七珍」「松江水郷祭」など、今日でも観光面で使われ続けている言葉を創始した名コピーライターであり、名プロデューサーだったそうです。

そして、この民藝運動に松江から参加した作家を紹介するにあたって、壇上に展示台を設け、吉儀先生所蔵の出雲民藝紙（安部栄四郎遺作）、船木道忠・研兒制作の花器、袖師窯のティーセット、湯町窯のエッグベーカー等を並べ、手にとりながら説明されました。

こうした昭和初期の松江における民藝運動の流れは、一時的なものに終わらず、戦後、「松江美術工藝研究所（通称松江美術工藝学院）」の開設につながっていきます。同研究所が開設されたのは1947～1948年の2年間だけでしたが、ここでは、金津滋（染色工藝）、鈴木尚夫、藤本均の受講生3名が民藝運動の理念に確信を持ち、多々納利雄（木工藝）、石村英一（漆工藝）、野津弥一郎（めのう細工）らが育っていったそうです。

さらに現代の事例として、吉儀先生自身も関わっている、工藝と食の異業種交流グループ「MATSUE 流の会」（1989年結成）の活動を紹介され、海外への視察や展示会出品を精力的に行っている様子を報告されました。

むすびに、松江では江戸時代、6代藩主・松平宗衍の延享の改革（1747年～）と7代藩主・治郷の明和の改革（1767年～）の成果として木綿・鉄・薬用人参など各種の産業が育成されたこと、明治期には産業革命を経験せず手仕事は機械製品に駆逐されたこと、しかし、昭和初期からの民藝運動において手仕事の復興運動がおこったこと、を指摘されました。

そして、産業振興を進める上での提言として、松江には今でも陶器・磁器・漆器・織物・和紙・木工・鉄器・銅器・来待石・表具・和菓子・日本酒・かまぼこ・蕎麦などの手仕事は広範に残っており、もう一度、手仕事を松江の産業振興の核に据える必要があるのではないか、と述べられました。